

水源禪師法話集 7

2011年9月～10月





目次

9月18日法話.....	2
9月19日法話.....	5
9月23日法話.....	8
9月24日法話.....	15
9月25日法話.....	21
10月2日法話.....	24
10月9日法話.....	31

9月18日法話

般若心経との出会い

私と仏との出会いからお話ししたいと思います。私は生まれてきて、「一体死とはあるのか、来世とはあるのか」と若い時、色々考えていました。分からないので、色々な哲学書とかを際限もなく読んでみたりとか、科学的な本もそこに真理が有るのではないかと思って一杯読んでみたりしました。それで若い時に、高野山の女人堂で尼さんに錦糸で織られた西陣織の財布をもらった。そこに般若心経の事が書かれてあったのです。

で、それを見て、はっとして、「世の中にこういうものがあるのか」という事で、これがそのお経です。それからずっと30数年間、私の先生、印幻禅師にその指南を受けながら、先生に、「私はこれしか知らないけれど、良いのですか」と聞くと、「それで宜しい。それで行きなさい」ということで、ずっと般若心経ですね。これだけが日常の指針でした。

その時にやっぱり、「色即是空、空即是色」。「ワーッこういう世の中に聞いたこともない凄まじいことが有るのか」とショックでね。そういうことで、「彼岸に渡ってどうなるのか、私だけ良い思いしてどうなるのか、極楽へ行ったって私だけ良い思いしてどうなるのか」という、もう小さい考えでね。ところが仏の教えというのは、彼岸に渡る為のものです。この世の中はやっぱりあまり良くない、と。であっちに渡るにはどうしたら良いか、という事の解説書がたった260文字のこれ（心経）なのです。

で、世の中には8万4千の法とあって、色々なことがありますけども、結局ここが入口なのです。でこれをずっとやっていた時に、分かったような分からないような、弘法大師様が、「まず読みなさい。読んで、読んで、読み尽くしたら度通する」という事で、結局あのミャンマーのパオのアビダンマ、サンガの法に出会ってね、そしてその時にびっくりしたのが、「観自在、わーっ、ヴィツパサナーを五自在でやる人。深くサンカーラ（行）を見て般若波羅蜜多。向こう岸に渡る智慧。時に照見五蘊、つまり5カンダ（五蘊）、4エレメント（四大界）。色受想行識、地水火風。「それを見たときに一切の苦が消えます」と言われた。確かにそうです。で、その内容を今度一体どうなっているかと。

色即是空、空即是色、まさにカラーパ（微粒子の集まり）を見たら空でした。体が透明になって空なのです。このように心経はその解説書なのです。一字の項目の題目なのです。「究竟涅槃三世諸仏」、それも言います。そういう風に、ではこの般若心経と法華経はどういう関係があるのか。法華経の中の一つ初めにまず言っている三法、つまり四諦、やっぱり苦諦、アニッチャ・ドゥッカ・アナッタ（無常・苦・無我）、苦の原因、それでアクサラ（不善）が固まる。固まるというそれを、どういう風に消すか。それをクサラ（善）にしていくか。クサラ、アクサラという、それを全部ヴィツパサナーでやるのです。

その方法はどうしたらいいのかと言うと、それはサマタ、ヴィツパサナーです。観る必

要があります。これが法華經の真髓です。で、その法華經を簡単に般若心經では説明しているわけなのです。

般若心經と理趣經

では般若心經と理趣經とはどんな関係があるのかと言うと、理趣經というのは実相を説明するのです。般若の実相はどうなっているのか。すべては結局、汚れることも無く、垢が付くことも無く、という理趣で実相を説明しているわけなのです。「あまり深刻になりなさんな」と。

そしたらチベットではもう一つ般若心經法相。実相の奥義はどうなっているかと。そしたらやっぱりこの中で出てくるのはカラーパ（物質の最小微粒子）を觀なければならぬのです。こういう風に色々なカラーパの内容を書いています。ということはやはりニミッタ（瞑想で現れる光）を使ってすべてを点検しなければいけないのです。点検すると言ったら、結局 2,3 ページで書かれているのだけれど、これ全てのカラーパとナーマ（精神現象）を觀なければいけない。で、刹那心というのね、これ全て觀なければいけないのです。

でこのあと、自分の過去を見ます。未来も見ます。そしてそのあとに今度は、四方面から全てをもう一回、物質も觀るし、心も觀ます。で、これからヴィツパサナーに入っていきます。で、最終段階は空（スンニャータ）なのです。「色即是空、空即是色」、やっぱりここに帰ってきます。だから分からなくても良いからただ読めよと言ったら、心が繋がって行きますからね、こういう出会いが出来るわけなのです。ここが核心で、実際に阿弥陀の世界は、確かにすばらしい。そこに行くにしても、やはり禪定をもって心を一心に信心して、結局彼岸に渡るために阿弥陀の国に行くという事になります。そこに行って修行して彼岸に渡るという事になります。だから全てが何の矛盾もないわけなのです。

南方であれ北方であれ、どの方法でも、なぜ生きているかと言ったら、そういう大世界の仏性を全て持っているから。だから最終的には誰も彼も仏になると言う、死んで成仏。確かに死んで次の旅が始まります。ずっと何回も何回も、こういう事に会うまで。出会ってからまた修行します。

そして一番良く言われるのがパラミタ、功德、あっち（彼岸）に渡る、パラミ。いっぱい高德を積んで行けば、あっちに渡れますよという、その最高の高德がやっぱり叡智。叡智と言うのは觀る事ね、頭じゃなくこういう体験ですね、体得。そういうことで、みなさんが全て仏になると言う事です。確かになります。かといって寝ていたらいつまでも寝ます。いつかは起きてしなければいけません。そういう事で、結局お經の意味はそこです。核心は、今言ったところです。

この法相奥義も本当はチベット語なのだけれど、チベットのラサで手に入れたのです。チ

ベトナム人の為の本屋さんがあるけど、一切チベット語で書かれているから、中国語でも書かれているところで手に入れた。私はこれが一番重要だと思ったのだけど、内容を開いてみれば、さっき話したように、チベットであろうが南方であろうが、やっぱりつまるどころこなのです。そういう事です。



9月19日法話

因縁を観る

昨日は般若心経、般若波羅蜜多理趣経実相経、それから法華経の関連と南方経典のアビダンマッタ・サンガハの関連を軽く説明しましたがけれども、その中で一番大切なことは、四界分別を通して因縁を観ると言うことなのです。因縁とは、なぜこのように生まれてきて、何の目的で生きているかと言うことにもなります。それはもう前世で決定して来ているから。それはなぜかといったら「執着、執着」と言われるでしょう。その執着がなければ誰もこの世に生まれてこないのです。動物であろうが、餓鬼であろうが、天神であろうが、執着、タンハーによって。執着というのは完全な智慧ではない、不完全なものです。不完全によって、今私たちのこの人間という身体を持っているわけです。

つまり、「生死を良く見ろ」と言うことは、死は無いのです。生まれ変わり、生まれ変わり、生まれ変わり。どうしてダライ・ラマさんが有名かといったら、14回も続けて今と同じ所に生まれていると言うことです。ドルジェ・比丘は16回。ダライ・ラマさんは14回。パンチェン・ラマさんは12回。その秘法が伝わって、その行をやれば、そういうタンハー執着。何処にタンハーを持てばそういう条件に入れるかが分かっている。科学的なものなのです。だから、誰も彼もが、この世に生まれて来るが、その原因があるわけなのです。

ここで、北伝仏教がなぜ49日とか、先祖供養をするのか。こっちの時空と、自分自体が時空を走るときは違うのです。ちょうどアインシュタインが、ロケットに乗って光と同じスピードでいけば、時間が止まってしまうと言ったけれども、こっちの世界から見れば、百万年の時空を超えて、ロケットが飛んでいるわけなのです。アインシュタインの理論も、短いここで見れば正解なのです。でも全てではないのです。ですからマックス・プランクの量子力学というのも、カラーパ（物質の最小微粒子）を観たとき、現象が非常によく似ているなと思いました。粒子の力学と、量子力学とが私たちの体の中で二つぴったりと合わさっています。マックス・プランクも、アインシュタインもどちらも正解。仏教の観点からみて、どちらも非常によく理解できます。

私たちはそういうことを見る究極の力を持っています。だから因縁、因縁というのは、なぜここにまた生まれてくるかと言うことを、よく見て、「ああ、これだったらもうこういうことをしたくないな」と思ったときに、涅槃に行くわけです。消滅、そこがポイントです。昨日説明したように、仏教で一番大切な、全ての経典に共通していることは、三法、アニチャー・ドゥッカ・アナッタ（無常・苦・無我）。それが集まって、それが消滅して、それが消滅に至る道、ヴィパッサナー。または禅法ね。止観禅。これによってはっきり見たときに、タンハー（渴愛）と言うものが滅する。なくなる。

ということは、執着心がなくなる。ということは、この世を去れば、もう涅槃に行くしかないのです。だから、滅すると言うことは、タンハーが滅することなのです。すべてが滅することではないのです。

私は英語で習っているものだから、どういう風に訳せばいいのか。Factor of Dependent origination つまり、「生まれてくる原因」ということを漢字で書けば、私たちは頭がくらくらする程分からない。英文で読んで、いったいどういう現象があるかと言うことがパーッと分かった場合には、それを検証するときに実に楽です。こういうことも、私が、皆さんに説明しなければいけないと思うのです。

因縁、因縁というけれども、何を因縁と言うのか。勿論ここに座っているのも、因縁。しかし最も重要なことは、タンハー（渴愛）、執着心。これを観たときに、ニッバーナ（涅槃）に行くチャンスが非常に強い。それを観ないときは、いつまでもサンサーラ（輪廻）を巡っている。だからどうしてもこれを観る必要がある。北方禅で坐って瞑想していると、これが観えるのです。南方のヴィパッサナーでは、一つ一つこれをやって観てしまう。ですから、どっちがいい。どっちが悪いではなく、どちらでも良いのです。結果的には、どちらも一緒になってしまうし、右で観ようが左で観ようが、あっちで見えたら、こっちでも見えなければならないのです。どっちも正解と言うことですね。

だから、どこどこの宗教が一番だとか、どこどこの宗教が悪いとか、そういうことではなく、どれもこれも良いところを持っているはずです。だから良いところだけ合わせて良いところへ行けば、自然的に良い結果を出すようになりますから。だから、あまり固執しないで良いところはどんどん取って精進してください。

仏国に生まれて

質問：ペルーやカナダにおける精神世界の状況と、日本の状況の違いを教えてください。

それは、天と地の差ですよ。それだけの違いを皆さん持っているわけなのです。仏国で生まれて、特に「こうしなさい、ああしなさい」と言う習慣にもとらわれずに自由自在に、南伝仏教も勉強できるし、北伝仏教も勉強できる。誰も制約しないし、「1週間に1回は教会に行け」と強制しないし、自分の時間さえ作れば、本当に自由に好きなように勉強できる。ある国では、それすらできないしね。

ペルーに行けば、仏教の「ぶ」の字もないしね。私が40年前にカナダに行った時には、仏教の「ぶ」の字もない。知っている人は、それは邪教とか何とかいうことで。今はもう転換して、「何か素晴らしいものがあるのではないか」と。そして私のところへ来る人たちは、心に道を求める人だから色々な現象を観ます。それで、この世には、不思議なものがあるという。キリスト教だけでは分からないものがあるし、どんどん心も変化してくるし、

安定するものが、出てくるわけなのです。

だからこうして仏教に巡りあって勉強できるということは、実はどんなお金を積んでも買えないすごい宝物をもらっているわけなのです。何千億、何兆円もらってもこういう機会には出会わないわけです。向こうの人が言ってたけれども、「私は、億万長者に会ったり、ハリウッドのスタートとかいろいろ見たけれども、会って話せばそこら辺の人と一緒に。素晴らしいとか何もない。外から見れば華やかだけれども会って話せばこれといって何もない」と。

結局こういう風な仏の教えに出会うということは、たいへんな幸せなのです。南米にいったら、仏の「ぶ」の字もない。インカ帝国が滅ぼされて、宗教を押し付けられた。右往左往して結局残ったのは、土俗の庶民宗教。正式なインカンのお坊さんは、全部なくなってしまって、精神を向上しようとしても、やり方が分からないわけです。でも、ちょっと話聞いたら空の世界もあるみたいだし、チャクラのことも知っていました。私がちょっと座ったら、「あ、この人は禅のチャクラを知っている」と。今、全部無くなって本当の食べ物が入らなくて、苦しいわけなのです。

私が見た限り、押し付けられた宗教である南米のカソリックの場合は、ほとんど本当のことを教えていない。ただ、「こうしなさい、こうすれば、神に救われる。何か良いことがある」と。それを信じている。信じる心によって奇蹟が起こるだけであって、教理とか、深く道に入ることができない。というのは、神はここにあって、私はここに近づけないようになっています。その苦しさは大変なものです。

仏教の場合には近づけるわけなのです。近づけるどころか、その世界を見せてくれる。だから、こういう仏国に生まれて仏教を勉強できるということは、ものすごく幸せなのです。特にお寺に生まれた方は、お寺のことを守ることで必死です。つまり、屋根の修理とか、色々なことがありますからね。もう経営で忙しくて、仏教のことを勉強したくてもできないのが現状だと思います。だから皆さんが、こうして自由自在に在家で勉強できるという今の世の中は、実は、本当にありがたいことなのです。

経済の問題とかいろいろなことがあります。逆に経済が潰れたときには、もっと皆さんが楽しくなると思います。経済がこうして発展している時には、ますます歯車が回るみたいに、ガアアッとやられるからね。昔は、本当にゆっくりしていました。夕方になれば夕涼みで、火を焚いて、なんかお菓子を食べて、お話して。日本全国がそうだったから。今、そういうことができない。話もない。だから、歯車が今壊れるということは、実はこれ良いことなのです、精神的には。だから、悪いように考えないで、ますます経済が発展してしまったら寝る時間もないようになるかもしれない。だから悪い方に考えずに。そういうことです。

9月23日 法話

私・個人という思い

今日は皆さんと一緒に瞑想できてありがたく思います。高度 1 千mに近ければ、肩の荷が下りて楽ですね。海拔に近ければ、それだけまあ贅沢というか、まだ修行ができないとか、やっぱり体が重いですね。3 千mになったら、非常に心が落ち着くとか、もっと楽ですよ。ペルーのクスコでは、2 月ごろ一ヶ月おりましたけれど、非常に楽ですね、雑念が消えて。難しい本でもよく読めました。そういうことで、色々環境も影響します。特に、今は世界的に、経済的な大嵐。まあその前に日本では、三陸沖大地震、それから福島原発事故。数年前、2004 年でしたかね、アチェ大地震で三十万人が亡くなりました。

まあ、そういうことをお釈迦様が言われたのです。この世の現実の成り立ち。いつも、何が起こるか分からないということで、無常（アニッチャ）。それから、良いことが起こればいいけれど、悪いことがボンと起こるし、戦争が起こる。そして、自分の、本当は無我（アナッター）なのだけれど、私、我（アッター）、アッター、この肉体という、その錯覚によって、これが現代病の悩みになっています。

東京の法話会で、お経についての関連性をお話ししました。それから、その中で一番大切なことは、四諦。苦。苦が集まる。それから、苦を消滅させて、ニッバーナ（涅槃）に行く。苦（ドゥッカ）をいかに離れて涅槃の世界に行くかということ。そして、その中で大切なことは、十二縁起、因縁。因縁をきれいに説明したのが、どうして生まれて、また生まれ変わって、というこの繰り返し。

それで、理趣経の講話の中で、非常によく説明されています。この方は、三井英光という方ですね、高野山出版社の。ちょっと良いなと思ったのが、132 ページに書かれていますけども。これ、昭和 44 年が最初の版で、ちょっと古いと思うのですが、これが、高野山では非常に読まれているみたいです。現代の誤れる観念の一つに、個我実存の思想があります。我（アッター）、私。個人。個我。個我実存。私が存在する。で、来世もないし、前世もないし、今この一瞬、これだけであるという観念にとらわれています。

これはどこから来るかといいますと、その昔、コンスタンティノープルは有名ですね。ローマ帝国、世界制覇、というより、まあ、地球の半分、その北半球で三千年の帝国。そのときの、確立されたのが、コンスタンティヌス皇帝ですね。そのコンスタンティヌス皇帝はキリスト教を取り入れたのです。

なぜキリスト教を取り入れたかといったら、結局そのとき、日本でも大化の改新みたいに戦争があつて、政敵を滅ぼさなければ自分がやられる。そのときに、啓示を受けた。そ

の啓示は、キリストのサインだったのです。で、それを掲げて戦ったおかげで大勝を得た。それで、皇帝に上がって、キリスト教というものは良いものだ。ということで、国家の宗教にしてみたいです。そのときの法王が、コンスタンティヌスの病気を治したとか、色々な伝説があります。そのときに、一般庶民は、一つの前世もなし、それから、来世もなし。この世一つだけ、ということにしてみたいです。

その前に、ニケア公会議とって、AD300年あたりかな、キリスト教内で前世があるかないかと大論争が起こって、そのときに、前世もない、来世もない。今これだけで、死んだ後は審判を受けるという風に、そういう教理でやってきたわけなのです。これは完全に間違ってますけども。

ここで現代病である、西洋の、個人の人生というもの。今これをいかに幸せに生きるかということが基本になる。今、ヨーロッパでもユーロがもう暴落し始め、それから、ウォール・ストリートも2008年、これから今、オバマがまたお金を刷る代わりに、短期利済を長期利済にツイストという方式を使って何とか逃げ切ろうと思っているのだけれども、結局お札を刷る代わりに、架空の借金の枠を広げるわけですね。

実際は何もないのだけれども。しかし、一般の投資家は、お金をなくしたくないから、株を引き上げるわけです。株を引き上げたら、会社は資金がなくてやって行けない。資金がなくてやって行けなければ、一番良いことは、人件費を削る。これがもう会社にとっては最高の経費を浮かす方法なのです。これが重なって、今の不況、大不況。

というのは、この大不況から、好況に入っていくわけなのです。あの、1930年代ですか。今まっしぐらにそっちに走っています。でもね、そういうことで、「ワードどうしよう」って。そうじゃないのです。この前も嵐が来たでしょう。過ぎれば平安なのです。そういうことに惑わされない、ということをしっかりこの瞑想で身につけてほしいわけなのです。

苦とはなにか

だから、結局一体このお経は何を言わんとしているか、二回の法話で、最も重要なポイントは、四諦と十二縁起なのです。では、その苦、一体苦とは何か。それは、病気の苦とかね、25位あるのです。ちょっと、調べて……。私が、ヴィパッサナーでやった、苦の解説をちょっとしてみます。

ヴィパッサナーでは、ひとつの、例えば、苦難という方法を4つの方面から確かめます。ヴィパッサナーですから、完全に観るわけです。ルーパとか色々なものを実際に、そのもの自体を観てしまうわけです。苦難ということ、観念じゃなくヴィパッサナーで観てしまう。本当にこれは苦であると。

その、suffering (苦) ですね、ドゥッカ(苦)。ラーガ、これは disease (病気)。パーっと

観えてきます。4方面から観ます。それを詳しく言えば頭がこんがらがらがるから。それから、アーガ、**calamity** (災難、大災難)。起こったでしょ。それから、ガンダ、**boil** (危機)。「あー、こわい、交通事故」とかね。それから、サーラ、**dart** (急激な突進)。車が止まらない。この前あったでしょう、アメリカで。トヨタさんが徹底的にやられた。あれですよ。「おー、どうにもならない」。人生でそういうことがあります。

そして、アーバータ、**afriktion** (苦悩)。「あー、どうしよう、お金がない。お金を払わないといけない。約束をどうして守ろうか」。これですね。これ全部観るのですよ、ヴィパッサナーで。それから、ウッパダダーパ、**disaster** (大災害)。この前の東日本大地震、アチェ大地震とかね。そういうことです。それから、バーヤ、**terror**、よくジョージ・ブッシュがね、「テロリストが来る、テロリストが来る」といって、飛行場でもう全部チェックするでしょ。そういう風な人を怖がらせるとかね。そういう、鉄砲とかテロリスト、爆発するとかそういうことですね。

それから、イティ、トゥレード、厄病ですね。例えば前に、あの H5 なんとかという、「みんな予防注射しましょう」といって、結局は何でも無くって (笑い)。そういうこと。それから、ウッパーサーガ。脅威。「敵が攻めてくる」とかね。何にもしないのに、あの人が私を脅かす、とかね。そういうことですね。これで 10. 11 番目、アッターナ。「誰も私を保護してくれない。守ってくれない」ということですね。これもドウッカ(苦)、全部。

それから、12、アレーナ。家もない、嵐が来て、巖もない。誰も、どこにもその、身を隠すところがない。それはすごいものですよ。私が、今から、何年前だったかな、4,300m のティティカカ湖で。4,000mだと木がないのです。突然雲が暗くなって真夜中になって、もう一つも見えない。風は吹く、雨が降りつける。どこにも身を隠すことができないという現実の話。そういう風な、どこにも心を寄せるところがない、とかね。そういうことにもあります。これが、結局、アレーナ、**no shelter**。避難するところがない。

アサラーナ。今度は、国で戦争が起きるから逃げる、と。逃げる場所がない。スーダンで、撃ち合いがやっても、どこにも逃げるところがない。ただその場で、死を待つとか、ルワンダ、ウガンダの大戦争の時に、もう何百万と人が死にましたよね。そういう、避難するところがない。それから、バダッカ。殺戮。この前リビアで、バババババーッと、来るでしょう。空からとか陸から殺戮が始まる。そういうこともドウッカ(苦)です。それから、アガムーラ。100%の、災難。絶対に災難が来るとわかっている。もう逃げ切れないという。これがアガムーラ。16 番。

アディナーバ。危険。**danger**。危険信号とか、危険のサインですね。ササーバ。とりつかれる。サブジェクターナ。とりつかれるわけですよ。悪霊とかね。例えば、ほんとに、麻薬にとりつかれるとか、お酒にとりつかれるとか。とりつかれてしまう。精神上であろうが、物質的であろうが、ゲームであろうがね。そういうことです。これもドウッカです。

マラアミッサ。これは、「悪魔の誘い」ということです。悪魔が良い人を釣り上げるみたいだね。悪い仲間が、例えば北米では、小学生・中学生に、マフィアみたいな手下が来て、麻薬をただであげてみたり。まず、それで吸わせて、お前これが欲しかったら他の友人に売れ、とかね。そういう、これがマラアミッサ。悪魔の誘い。18番は bait、餌ですね。「悪魔の餌」。19は、ジャティタマーナ。これは、生まれる時の苦、苦しみ。「お母さんがお腹痛めた、どうしよう。それから、子供が健康に育つのか」とか。産む。そういう色々な悩み。周りの人とかね。これがあります。

ジャラダンマ。これはね、年を取って行く。衰えるとか。朽ちていくという。それから 21番。バヤディダンマ。病気、色々な病気。それから、ソーカダンマ。「どうしよう。あー、私の友人が、なんか災難に遭ってかわいそうだ」とかね。私の兄弟とかお母さんお父さんがとか、悲しむわけですね。

それから、パリデバダンマ。lamentation。これは、嘆くわけです。もっと激しく。ウパサヤダンマ。これはもっと激しく、「もう絶望的だ、どうしよう」と。これが 24番。それから、サンマキレーシッカダンマ。これは、デプリメント。ということは、枯渇していくわけです。完全にミイラ化とかね。こういう風にドウッカは、25に分かれています。それを、また、4方面からヴィパッサナーで観ます。それだけドウッカというのは、非常に多いのですね。ドウッカ(苦)。4方面については詳しく言いません。それはもう、ヴィパッサナーの最終段階に入りますから。今、ドウッカということはどういうことか、説明したわけなのです。

そういう風にして、無常ということも大体 10 あります。常ならず。これは良くわかります。崩壊させる。移り気の。腐りやすい。耐えられない。変わる。芯がない。絶望。絶滅。死。形成してしまった、と。これが全部、アニッチャロッカーナ。この、世相のことを詳しく書いてあります。ついでに、アニッチャ(無常)、ドウッカ(苦)、アナッター(無我)のアナッター。

アナッターは non self ですから無我ですね。それから、真空。虚空。空(そら)。宇宙。space。または、私たちはどうにもならない。あの木が自然に生えていく。私たちの体が自分で大きくなっていく。これもアナッターですね。それから、空っぽ。空っぽもアナッターです。何にもないという。それから、トゥッチャータ。無駄なこと。これもアナッター。これが全部組み合わさっています。ここまで来るには、大体ヴィパッサナーの一番入口の時に、非常に詳しく、はっきりと叩きつけます。で、この中の四諦。いかにして、この 25 のドウッカ(苦)を消滅させて、ニッバーナに行くかということが、今度は、十二縁起に入ります。

十二縁起（因縁）

この、十二縁起の関連性をちょっと説明します。というのは、これは仏教では、核心の一番大切なところです。まず、心があります。識、チッタがあれば、結局、般若心経のサンカーラ、行ですね。「観自在菩薩行深」のサンカーラ（行）をヴィパッサナーで深く観た時に、このコップを見た時に、眼からこれが入って、それから、12のサンカーラ。もう心が、タタタターッと動くのです。それをまた説明すれば色々あるから、まあ適当にしておきましょうね（笑い）。

これはチェータシカ（心所）というのですけど。どういう風な作用があるかと簡単に言えば、受想行識ですね。識ですね、識。この、カラーパを受けて受想行識。チェータシカ（心所）と言います。これは、心がちゃんと爽快な場合は34の刹那心が発生します。そういうことをしっかり書いた本は、日本にもないし、南方にもありません。それから、チベット仏教でも書いていません。これは、実は多分泌法になっているのか発表しないのか分からないのですけども、日本語で翻訳されたアビダンマッタ・サンガハですね。

ところが、これを説明しているのは、たったの数ページですけども、実は、刹那心はヴィパッサナーでいちいちこれだけやらなければいけないのです。数字だけでも、これひとつひとつ書いているのです。だからもう完全に抜けてしまっています。だからいくら本読んでも分かりません。ただ大乘ではこれはずして、こういう講話でね、心の対話で何とか近づけようとしていますけど、これが現実です。

というのは、結局、心の発生状況は、パサ、ヴェーダナ、サンニャー、エカガータ、ジビタトゥンドウリア、マナシカーラ。これがダラーッとくるわけです。触・受・想・一境性・命根・作意。こう言っても分からないでしょう（笑い）。体験すればすぐ分かります。だから頭でいくら叩きつけたって分かるわけがないのです。ただその、これサンカーラ（行）なのです。これが34続きます。

なぜかといったらこの後に、ヴィタッカ（尋）、ヴィチャラ（伺）、アドゥモカーラ（勝解）、ヴィリヤ（精進）、ピティ（喜）、チャンダ（意欲）、これで13。タタタターッときて、この後にまた、日本語で言えば、心軽快、身軽快。それから、心柔軟。それから、身適応性、心適応性とか、こういうことがタタタターッときて、34の刹那心が起これば、善、パンニャー（智慧）、善になります。34じゃなく21、14とか不完全な時には、よくない、悪い、苦に走ります。だから、いつも34で行けば、自動的に、ニッバーナに行く。苦が消えてしまうから。で、その因果関係が、こうです。

まず心があって、そのチェータシカ（心所）。これが非常に重要な今34の、因縁を作るもとなのです。また不完全な場合は、アクサラ（不善）。10、21、16とか色々な条項があ

ります。これもヴィパッサナーの最終段階に入ってきますから、ただ説明だけします。まず、なぜ私たちはこの世に生まれたかと言えば、アビッジャー（無明）があるのです。無知。無学。それから、サンカーラ（行：形成作用）。さっき言ったサンカーラ、formation（形成）ね。過去の因縁。そして、自覚、意識があるわけです。

この三つが前世の力で、現世にあります。現世は、知性、精神力、知力。ナーマ（精神現象）ですね、心。それからルーパ（物質現象）。この、物質は34、タイプがあります。ルーパ・カラーパ。34。あの、54。眼の物質性が54あるのです。それから、心臓のこの物質性も54あります。ひとつひとつ点検していきます。それから、身体は44なのです。ま、大体聞いてください。詳しく、これを見ても分からないと思いますから、ただ、軽く説明しておきます。

それから、鼻。ジビタ。この鼻も54の物質性があります。それから、舌。それから耳。54。それで一、二、三、四、五と六。五つの入り口から、世間から入りますけど、直接心に入る場合は、その、サイキックとか、そういうことです。六つめの入り口があります。五（門）は必ずこの心に直接入ってきます。心で直接観ることもありますから。そういう風に非常に、入り組んでいるのですけども、実は、観れば簡単なのです。体験しないで覚えようとしたら実に難しい。だから最初の500年間、お釈迦様とかがそういうことを本に書かなかったのは、ここにあると思います。

今現代こうして私が色々な本読んでも、肝心なところが抜けていますからね。結局体験していなければ、どこが抜けているかどうか分からないのです。ただその、結局過去の因縁は、無知、それから自分が何をやったか。それから、自分という意識ですね。これが、今現在あなたを形成しているわけなのです。この、現在のあなたを形成しているのは、知性、精神力、知力ね。ナーマ（精神現象）。心。いつでもなんか、楽しい、それから怒りとか、勉強しようとか。それから、物質。色々なものがあるでしょう、車買ったりとか、物質ね。それは結局どうなるかと言ったら、最初に眼・耳・鼻・舌・身、五つの入り口と心ですね。眼耳鼻舌身意。だから、般若心経が合っていると私は言っているのです。その通りであります。

「色即是空は本当だけれど、空即是色ではない」と言ってる人もいるけれども、それではこれが成り立たない。また、南方で私が観たヴィパッサナーでも、ぴったり合っています。この通り。だから結局、体験してみなければね。「偉い先生が言ったから、そうかなあ、その通りだろう」となっちゃうわけです。だから、そこ気を付けてください。私も、観なければ、「ああそうかなあ」って迷ったかもしれませんが、私の体験でぴったり合っていますから。

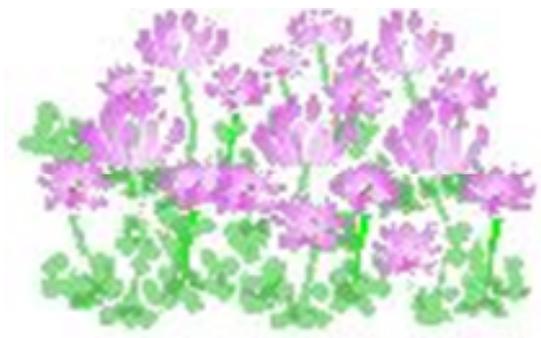
マハーシの最大の問題は、観ることができない。ヴィパッサナーができない。観自在、

つまり五自在を使って観る、と。これがヴィパッサナーです。でなければサンカーラ（行）が観えないから。さっき言ったドゥッカ（苦）もちゃんと観てしまうからね。頭じゃないのです。そこなのです。十二縁起の五番ですね。六根。

それから、六番に来るときが、パサ、**contact**、触る。（手で体を触って）これでわかるでしょ。触るから、感じるでしょう。それからそういうことによって、例えば、触る、**contact**、お酒飲むと、「おいしい。もっと飲みたい」。この、切望、ね。このタンハー（渴愛）、これが実は次の世界に生まれる問題なのです。例えば、その、切望、「私は仏法を知りたい、一生懸命知りたい」、これもやっぱり切望、タンハー（渴愛）で、次の世界に生まれます。これがなければニッバーナに行っちゃう。何にもなければ。ところが、ドゥッカ（苦）があるからあり得ない。ドゥッカを消してしまわなければ。

九番目は、すがりつく。ウッパダナー（執着）。そして、現実的に、こうして私が存在するでしょう。これが現世です。来世は、ジャーティ（誕生）。ちょうど現在が、来世にまた誕生する。生まれる時は、死ぬ時に、結局、身体、カーヤ・ルーパ（身体）、とチッタ、心、ね。意識。それからセックス（性）。この三つだけが、時空を超えて新しい生命体に入っていきます。誕生（ジャーティ）。

それから、また、衰えて死ぬ。で、また戻って、衰えて死ぬ時に、生まれる時に、今度はまた、どういう条件が必要かと言ったら、その時に、無知。無学。真理をはっきりわかってない。で、その時に何をしたかによって、その時のどういう意識であったかによって、天界に生まれるか、地上界に生まれるか、暗いところに生まれるか、動物界に生まれるか、が決まってきます。ずーっとこの繰り返しです。これを輪廻する。これが因縁の本源です。因縁、因縁とザーッと軽く、非常に速いスピードで、表だけ通りましたけども、そういうことです。



9月24日 法話

この世界は苦である

東京では、四諦と十二縁起について、簡単に説明しました。昨日はもう少しついでで、なぜこの四諦・十二縁起が大切なのか、と。この十二縁起によって輪廻を繰り返す、私たちは、“また生まれ・また生まれ…”と繰り返す、このことをお釈迦様ははっきりと観られた。また、「この世界は苦である」ということも、お釈迦様ははっきりと観られた。昨日は、悲しみや災い、不安など、この「苦とは、どういうことをいうのか」を説明しました。

その昔、ペルシャのゼミール大王が若き日に即位した後、学者達に「最も精密な人類史を編纂しなさい」と命令し、彼らは50年かけて書きあげました。そのまとめは「人は生まれ、人は苦しみ、人は死す」と。50年間の研究結果は、十二縁起で言っていることなのです。仏教では、このことを詳しく、科学的に説明しているのです。でも、あまりに難しくてわからないかも知れない。「なんで、私だけが涅槃に行って良いのか。極楽浄土へ行って良いのか。これで良いのか。他の人はどうなるの？人が苦しんでいるのに」と。

でも、この世は本当に苦しみの塊なのです。今回の大震災で津波が襲いました。現場にいたとして、目の前で人が流されている。そこで「人が苦しんでいる、さあ飛び込んで助けに行こう」と果たしてなりますか。「私だけが助かって良いのだろうか」と、その時に考えると思いますか。そうではなくて、「自分は何とか助かろう」と思って、みんな必死に避難するわけでしょう。私たちが生きている状況とは、そういうものなのです。この津波の状況と一緒に、実際には余裕がないのです。

ただ、菩薩が「これから津波が来ます、こっちへ逃げましょう」と。これが仏道の教え、禅などの修行なのです。菩薩のお導きによって、例えば、達磨大師が禅を残してくださったり、サーリプッタ尊者がお釈迦様の教えをしっかりと受けて、ヴィッパッサナーの手法を残してくださった。ナールンダ大学が滅ぼされても、奇跡的にこのヴィッパッサナーの手法がミャンマーに残っていたり。

“達磨大師の禅”、“南伝禅のパオの手法”、皆さんが今、この二つの方法に出会っているということは、宇宙的な大栄光を受けているということなのです。お釈迦様と達磨大師の直接の教え。どこのお寺でも、瞑想は40法も教えないからね。ヴィッパッサナーについて書かれた、売られている、どの仏教本を見ても、内容が少しずつ欠けている。

例えば、眼には54の物質性がある。耳・鼻・舌も54。ほかに心臓や身体、これら一つ一つ検証しないとイケない。これでルーパ、色。だから膨大な数があるのです。般若心経にいう、受想行識。すべて眼・耳・鼻・舌・身体というように、非常に複雑なカラーパ（微粒子の集まり）で組み合わせられている。それを観るために、闇夜のフラッシュライトのように、ニミッタを当てて、一つずつ観ていく。光より早いスピードで、時間を止めてしま

う。だから過去も見えてしまう。

アインシュタインの理論は、合っているのです。「光より速いスピードだったら、時間は戻ってしまう」と。何故なら、時空を超えるから。だから未来も見えます。それくらい、心は力を持っている。

ゆえに、物理学的にピッタリ合うのですが、これを体験してみようという科学者は、まず今のところいないですね。数学など、色々と研究に忙しいし。しかし、もし体験できるのだと知ったら、物理学者はみんな研究をやめて、仏教の方にくると思う。ユーロでは、物理学者や科学者は、仏教の経典を実に読んでいます。

私の生徒に、世界最先端の数学を研究している教授がありますが、彼は私の言うことが良く判る。彼からすると、私は天才のように見えるらしい。しかし、そうではなくて、私はお釈迦様のことをラジオのように放送しているだけ。これは、お釈迦様の凄さということ。最初は、奥さんが先に来ていたのだけど、旦那さんのほうが、瞑想好きになってね。なぜかというと、瞑想で心が研ぎ澄まされて、どんどん見えるから。ナーガルジュナの剣のように、サーっと切っていくから。

そういうことで、お釈迦様が説明された四諦が、仏教では必須なのです。私たちは苦の集積である。それをいかに消滅させるのか。それをちゃんと解き明かして下さっている。

苦の因果関係は、十二縁起の連鎖反応。だから、もし私達が生まれなければ苦は存在しない。因縁もなし。だから結局のところ、私達自身の存在な訳なのです。ゆえに、これを如何に消すのか。“あなた”を消せば苦が消えるわけです。では、消すということはあるのか。このカルマの世界で。これはありえない。ただ一つだけ、涅槃に行くことだけなのです。涅槃には苦が無い。大平安の世界。

これは実話ですが、カンボジアでポルポトが出てきた時、数百万の人々を殺したのです。僧侶も含めてすごい虐殺をしたのです。その虐殺が始まる直前、私の友人の祖父である僧侶の前に、インドラ（帝釈天）が降りてきて、「おじいさんを天の世界に連れて行く」と。そこで、おじいさんは「1ヶ月待ってください。私は皆にさよならを言ってから、あなたと一緒にいきます」と。

なぜ、帝釈天が降りてきたかということ、この素晴らしい比丘は、沢山の高德を積み、良いことをしているのに、これから起こる苦の現実を見たら、天の世界には行けない。苦を見てしまうから。その前に連れて行こうと。

では、帝釈天は、おじいさんを殺したのか、と。そうではないのです。次から次へと生まれて、みんな転生して行くのです。死というものは、本当は無いのです。ただ肉体が変わるだけ。帝釈天がやってきて、その恵みで自分の世界に連れて行ったのです。

もし、このまま残って、ポルポトの所業をみたら、カラミティ、苦をみてしまって、すごい高徳を積んでいても、天の世界に行けなくなると。だから帝釈天が連れにきたのです。行く前に家族には「私の死を悲しむな」と。「実は帝釈天が降りてきて、1ヶ月の猶予を持って、死ぬから喜んでくれ」と。そうして亡くなったのです。

この世は、苦が根底であるから。苦というのは、ただ“痛い・苦しい”という、そんなものではないのです。昨日説明したように、苦の20の要素がグチャグチャに絡まっている。

昔の詩人が、こう言っています。「世界は泡沫である。人生は束の間にすぎない。母体に宿るときから、墓場に至るときまで、人生は苦の連続である。ゆりかごから取り出される、それから気兼ね苦勞の末、育て上げられる。さて、こうした末に成り上がった人の命は不壊なればこそ、生命の頼りがたさは、水に書く絵、砂に刻める字も、愚かである。

内地にいて、感情を満足させる。けだし、これは人間の病気である。海を越え、他国に行くことは、困難であり、また危険である。時には戦争があり、我らを苦しめる。しかし、それが終われば、今度はまた、平和のために一層苦しむ。こうして、いちいち数えていった挙句の果ては、何が残るか。生まれたことや、死ぬことを悲観する。残るのは、ただこれだけ」まあ、こういう詩のほうが、なんか分かるのではないですか。

法華経には、こう書かれている。「三界には易きことなし。なお火宅のごとし」と。天界でも戦争があるみたいです。タミールナドゥの首都マドライで観た彫刻に、天界での戦争があり、殺し合いなどがズラッと刻まれていました。しげしげと見てきましたが、このことなのです。「集苦充滿して、はなはだ恐るべし」。

現実にリビアで起こっているようなことですね。ギリシャでも暴動とかが。「常に生老病死この如きの火、熾然（しねん）として息（や）まず」。我々の住む世界はあたかも熾然（しねん）として盛んに燃えている火宅である。釈尊のこの体験こそ、尊い人間苦への警告だったのです。結局、津波がきて、お釈迦様が「早く逃げて。早く山に逃げて」と仰って、誘導してくださっている。これが、実は我々の生きている現実なのです。

では、どうしたら究境涅槃にいけるのか。空には無が一切ない。だから空を見たとき、涅槃に行く。だから、南伝でも空が最高の奥義。禅でも空を知ることが、最高の奥義なのです。では、そこへ行くには、どのような方法を取ったらよいか。それは、「無所得をもつてのゆえに」。空に近づくには、波羅蜜ですね、高徳を積むと。人を世話する、お布施するとか、第一の波羅蜜は、布施波羅蜜。私の過去世の体験を見てもそうでした。それにより、仏法とつながって行きました。

弥勒菩薩の布袋さん、中国で有名な笑う仏陀ね、あの方は朝一番に市場へ行っては誰に何が必要かを見て、上げるわけです。笑いながらね。この方が、弥勒菩薩の行をやったのです。無所得、ただ全部あげると。簡単に見えることに、壮大なストーリーがある訳です。

この布袋さんは、お寺も持たなかった。着るものだけ。しかし、いつでも袋の中に財物を持って、ひたすら人に上げた。だから中国の人は、次に弥勒菩薩が降りてくるのは、西湖とハッキリ予言している。それはそれは、美しいところ。お寺も凄かった。

そうした「無所得を持つての故に、菩提薩垂・般若波羅蜜多を得る」ということでしょうね。彼岸への知恵、最高の知恵、般若波羅蜜多、これによって一切の惑いが無い。例えば、「お金がない、払わなきゃいけないな」とか、誰かに脅されるとか、そうした惑いが無い訳です。全てやるべきことをやっちゃってしまっているから、恐怖というものがないわけだ。いつ死んでも良いと。だから、夢の世界から一切換わっちゃって、究境涅槃を見ると。

私が般若心経で瞑想し、お告げを受けたことは、この方法はこうであると。20数年前に、この経を読んでから、後に瞑想で体験しました。人智では及ばないのです。何故かわからないけど、読んでバーンときて、「無所得の高徳・無所得の高徳」と。究境涅槃。やはり、言わんとするところは、そこかと。怖れなきもの、“怖れ無き”という生き方ね。

カトリックの最大の呪文は、神をあがめよとかではないのです。怖れ無き者、“Do not be afraid!” 怖れ無く！というね。一切の怖れなく、そうすると涅槃の世界へ行きます。“菩提薩垂の般若波羅蜜多、向こうに渡る智慧によるがゆえに、苦々あることなし”。怖れが一切無しと。“顛倒夢想を厭離して究境涅槃す” やっぱりここなのです。

ボディーサッタ・バイヤン・プラジュニャー・パラミタン・アスリタヤ・ヴィハラ・トゥ・ヤッチター・パラナ・チッタ・パラナ・ナーシッティ・トゥ・バラナ・アトラット・ヴィバリ・アッサー・ティカロ・カラット・ニシタニッバーナ。

今、原語で読みましたが、ここが般若心経の最高のところですよ。お釈迦様が、その当時こう言われたらしい。般若心経秘鍵には弘法大師様が、「七つの時に筵に座り、仏陀から般若心経を教わったけれども、まだその域にあらず」と書かれています。

涅槃の世界を目指す

だから、今日は苦がいかに恐ろしいかということと、涅槃の世界をまっしぐらに、まず目指しなさいということです。津波の時幼稚園児が先生に、「逃げましょう、逃げましょう」と連れられていく。素直に、そのように精進して下さい。瞑想して下さい、ということなのです。

確かに哲学的に、「他の人はどうなるのだ」とありますが、この世はペルシャ大王の学者が50年かけて調べた結論のように、その余裕は無いのです。

あなたが毒矢を射られてしまったら、まずどうするか。「この毒矢は“一体誰が作って、誰が打って、どこで作られて…”」と考える前に、まず抜いて治療しなさい。お釈迦様は、

このように仰られています。そういったことを考える余裕無しということなのです。

私たちは、生きてたかだか 100 年、そのうち 50 年は眠っている。20 まで勉強はするが、“本当の勉強”をする時間がない、そして、50 年寝た挙句、元気あふれて修行できる時間は、10 年分もあるだろうか。実際はないのです。

「あの人を救わなきゃいけない」、「世界を平和にしなきゃいけない」。これは確かに良いことです。菩薩の行です。本当に時間の余裕があつて、自分がまず水泳の達人になって、海で人を助けられるようになったというのであれば良いけれども、実際はそうではない。まず泳ぎを覚えて、自力で岸まで行けるようになって、プラス、人を助けに行く。力がなければ連れて来られないのです。渡り鳥が南に行くけれど、群れで怪我をしたものを南の地まで一緒に連れて行くことはできない。

つまるところ、良いことをしたら、必ず次は良い境遇に生まれます。だから悲しむことは無いのです。それが、「死んでしまった。これからどうなってしまうのだろう」。見えなからオロオロする。「暗いから見えない」と。無明ですね。立派なお葬式をあげてもらって、供え物してくれて、「今生で何もできなかったので、せめてこれで来世は…」とか、愛する人達が永遠の別れのお葬式をしてくれる。

でも分からないですよ、他の世でまた会ったり。それが、嫌な人でもね、因縁というのがあつて、また会うようになっているのだから（笑い）。一番判りやすいのが、お釈迦様とデーヴァダッタの話。

遙かな過去世、お釈迦様が鹿だった時、デーヴァダッタは狩人だった。そして、お釈迦様として生まれたときは、デーヴァダッタはいどこになって、殺そうとした。因縁というのは、良いのも悪いのもあつて、ずっと続いていくから。

また、こういう話もあります。あるとき、お釈迦様がおもちゃ売りの商人で、デーヴァダッタもまた、同じおもちゃ売り商人だった。お釈迦様がある貧しい農家に行ったとき、ある老婆が、「子供におもちゃをあげたい。家にある古い壺と交換して欲しい」と言った。その前に、デーヴァダッタも、その老婆に会っており、彼の目算では、それは純金の高価なものだった。そこでデーヴァダッタはもっと値切ろうとして、「これは捨て物である」として、去ってしまった。そこへやって来たお釈迦様は、「これは価値がある。純金である」と。そして持っていたおもちゃ全部と壺を交換した。

お釈迦様が船に乗って去る前、デーヴァダッタは老婆の元へ戻った。すると老婆は、「もう他の人に譲ってしまった」と。そこで、デーヴァダッタは矢のごとく川岸に急行すると、お釈迦様の船は出港したところだった。それで、デーヴァダッタはハートアタック（心臓

発作)で死んでしまった。こうした、怨念の重なりなのです。だから、お釈迦様は「悪いことは言わない、涅槃に行きなさい」と。「私でも、こんなに苦勞するのだから」と。

だから、“自分だけが極楽浄土、涅槃に行ってどうするの”ということですが、お釈迦様のこれらの話を聞いて、「なるほど、そういうことなら、いっちょう仏道をやってみるか」となるなら救いがありますけど(笑い)、そういう人は、100人に1人いるか、1000人に1人いるかどうか。そうした出会いがあれば、ぜひ進めてください(笑い)。



9月25日 法話

布施の波羅蜜

昨日は、苦についてのお話をしました。法華経で言っているように、苦があるからこの世は火の海の家のようなものであり、「だから早くそこから出て来なさい」と言うことの説明をしました。どうしてそこから出て行けるのかを、般若心経で言えば「無所得」と言うところが大切です。ということは無所得というのは、誰かに何かをしてあげたいということ。病気だったら介抱してあげたいと。その時は、報酬をもらって介抱するという気持ちではなく、「只、してあげたい」とか、お腹がすいた人には、何かを分けて一緒に食べようとかね。これが布施なのです。それで、三法、すなわち四諦、因縁、六波羅蜜。

大乘では、六波羅蜜の中で一番大切なのは、お釈迦様もされたように布施ですね。国を全部あげて、時には奥さんも子供もあげてという行もやられました。無所得—お腹がすいていたらね、沢庵一つでもおいしいのですね、ご飯にお茶をかけて。いっぱいあったらおいしさが分からないわけです。だから、布施と言う波羅蜜を行でやることによって、精進もよくできて、また定にも入りやすいし、般若の力が出てくる。

唐の時代から続いている大学がありまして、もう1400年以上かな。その大学は、ホウケンという大学なのだけれども、中国の再高峰の仏教大学です。そこの和尚さんとお話したときに、その方とはスリランカで出会ったのだけれども、やはり出会いですね。「やはり布施ですね。パラミ、パラミ、布施ということ。これが鍵ですね」と言っていました。やはり聖者の話を聞き、お釈迦様の事を見たけれど、無所得ですね。

で、そういうことをするから心にこだわりができない。すーっと生きて行けるのです。そういう気持ちだから、何があっても怖いとか、明日どうしようとかということも、上げると言うことに慣れてしまって、「明日食べられなければ、どうしよう」という恐怖がない。「まあ何とかなるだろう」と、そういう気持ちになります。それで、カソリックの最高の教えは、「恐れるな」と。この1件なのです。

昨日ちょっとお話しましたが、私が部屋で横たわったときに、犬の白ちゃんが“ワンワン”と吠えている。なにかと思ったら、小鳥の赤ちゃんがピョンピョン飛び跳ねている。電線の上には、40羽位いましたよ。鳥が集まってバーバーと啼いて。そしたら、白ちゃんの所に両親がもう体を張ってパーと飛び掛かっているのです。「私の子供を食べちゃダメダメ」と言うことなのだろうと思うけれども。その時にはもう恐れなく、やはり小鳥ちゃんが子供を育てるために一生懸命。無所得ですよ。

大きくして何かをもらおうと言うのではなく、一生懸命育てて、そしてその挙げ句、自分の体まで張って子供を庇おうと、恐れなく飛び込んで行く。そういうことによって、結局涅槃の世界へ行けますよと。

その涅槃の世界、こういう話がありました。私が昔スリランカを旅していたときに、ある聖者がおりまして、この方は、テーラワーダではないのです。ヒーナヤーナなのです。ヒーナヤーナは滅びてなかったのです。スリランカには、テーラワーダ、ヒーナヤーナ、バジュラ・ヤーナ、大乘、皆あります。私を大好きになってくれた比丘がいて、そこには不思議な秘法のココナツツの薬があるのです。

この世にたった二つだけで、それを飲めばどんな難病でも治ると言う。スリランカの神様の寺院のそばにお寺があって、彼の兄弟比丘がいるから、そこに行ってみたらということで、そこでヒーナヤーナの聖者に会いました。ヒーナヤーナの方は、ヨギみたいに白い服です。この方は、17か19の言葉を話すのです。そして、ありとあらゆる薬草のことをすべて知っているわけです。

で彼は、誰かが寄付してアシュラム（修行道場）を持っているわけなのです。私が行ったらお茶は出すけど、寄付とかは一切受け付けないのです。できるだけ受け付けないようにしています。というのは結局、因縁によってお返しなくしてはいけなから。それで通訳を通して問答をした。それで、私を部屋に入れて——部屋といっても、バラックですよ。金網を張って、ローソク一つで、天体や星の動きとか、そして何をしたら良いかを答える。

スリランカ第一の宝石商で、サファイヤの何百万ドルという行商をする方が、私をトヨタのランドクルーザー——あの国では1500万円くらいする——それに乗せて、連れて行ってくれたのだけれども、商売のことで、お伺いするわけなのです。聖者だから何でも分かるわけです。「どうしろ、ああしろ」ということで。

そのあと私も。で、彼は本当に質素。板を打ち付けたような金網の中において、私はこっち。板の長椅子に座ってお話するわけだけれども、話した後に、「ちょっと来なさい、来なさい」って。「中に入ってこれを見なさいよ」と。十二人くらいいたけれども、全部白い服を着ているのです。女性は長く、男性は白いヨギの服でね。「これが全部私の生徒なのですよ」と。

「この12名は、すべて涅槃の世界に行きます」つまり、「阿羅漢の位に達しましたよ」と。で、「お前もここにいなさい。49日で、ちゃんと涅槃の世界を見せてやるから」と。でも49日は短すぎるから、ちょっとパオの方がいるから、パオということが頭にあったから、「まあまあ、何とか」と言うことで誤魔化して、そこではなくパオの方に行ったわけです（笑い）。いや、49日は余りにも短すぎる。特急で行ってしまうから。

という風な方がおりましてね。やっぱり布施ですね。そして、大乘は、菩薩の教えなのです。それで、「いやあ、菩薩。止めなさい、止めなさい。そんな恐ろしいこと。すぐ涅槃に行きなさい」と。さっき説明したように、サンマーサンブッタサ（正覚仏陀）になるには如何に難しいかと言うことですよ。パッチェカブダ（独覚仏陀）というのは、菩薩

行をしないで、ゴータマブッタを傷付けて地獄に落ちたデーバダッタでさえも、今度上がってきてパッチェカブダになって、涅槃に行くと言うのだから。

あれだけの敵であろうが、お釈迦様は涅槃に上げてしまうという、すごいですよ。観音様は、その昔、「正法仏」というお名前だったと思うんですけれども。そして、仏から今は、菩薩になられてこの理想の世界を作ったらしい。私たちにしてみれば、理想どころか苦の世界だけれども、それなりに作って、いつも阿弥陀様を乗せているわけなのです。

そして、この阿弥陀様が涅槃に座を譲るときに、次の法主、この全宇宙の仏の先生は、観音様がその座をしめるということです。無量光仏ですから、無量の時間帯の後です。その間、観音様は菩薩行を続けて行って、いつも助けてくれているわけなのです。

だから、さっき言ったように、無所得の故を持って菩提薩達。私たちは人に善くしようとする菩薩の真似事ですね。これによって、般若波羅蜜多。つまり、向こう岸に行く知恵をもらえます、ということです。だから仏教ではこの三法すなわち四諦・十二縁起・六波羅蜜がとても大切なことで、その中でも最高に大切なのは、高德を積むということ。かわいそうな人は助けてあげるとかね。だから、弱いものいじめはしてはいけません。今の世は、強きものを助け、弱きものをいじめるという、まさに顛倒の世界ですけれども。その点を間違わないように。

さっき言ったように小鳥でも、自分の子供を助けようと、“恐れなく”犬に向かって行く。だから皆さんも、信念を持って恐れなく、そういう方向で生きていかれたら良いと思うのです。

ソクラテスがカンテラを持って人を探していると、「そこに一杯人がいるじゃないですか？」と聞かれた。それで、「あれは人じゃないよ」と。という風に、人と人が出会うのは難しいのです。特に本当の友人はまあ難しい。だから、キリスト様でも皆に裏切られ、磔になって皆逃げてしまった。それでも、「私は一切の衆生の罪を背負って天界に送ります」という願を立てたわけなのです。やっぱりこれもすごい菩薩行です。他の宗教もあれだけこれだと沢山ありますけれども、その中に沢山の聖者がおります。やはり心、心は仏性。心即是仏ということでね、実は仏も大世界なのです。だから、「私たちは直接この仏の大世界を見られるから本当に幸せなのです」ということを言いたかったのです。



10月2日 法話

四諦・十二縁起・波羅蜜

私は在家で長年、「般若心経」を読んでおりました。高野山女人堂で先生に、「般若心経」を頂き、それを読んで非常に心を打たれました。その後、とても尊敬する恩師・印幻先生に「般若心経講義（角川書店）」を教えていただき、それからこうした旅が始まりました。

「法華経」、「般若心経」、「理趣経」、「般若心経・理趣奥義」の関連性を5回に渡って説明しました。どのお経でも最も大切なのは、三法。そして、苦・集・滅・道をしっかり知ること。生まれることの苦、生きていくことの苦、衰弱して老いていくことの苦、そして死、ということを観て、お釈迦様は仏道に入られた。私達が生きている世の中の非常に深い現実を観るということです。

この5回の法話の中で、苦とは何かを25の項目に渡って説明しました。苦とは何か。なぜ苦が起きるのか。これは十二縁起なのです。十二縁起は、人が生まれてから死ぬまでの因縁が、理論的に説かれています。これをヴィッパッサナーで非常に明快に観ることができるのです。ヴィッパッサナーの最終段階では、どうしても自分の過去の生活を観なくてはならないし、なぜ生まれてきたのかについて何回も観る必要があります。そして、現在の人生、未来に生まれることも観る必要があります。それで、十二縁起が現実確固たるものであり、もはや単なる書物の世界ではないことが分ります。

それと大事なことは、六波羅蜜すなわち布施・戒・忍耐・精進・禪定・パニヤの智慧。この中で、一番大切なのは布施です。貧しい人や野良犬を見たら、少し食べ物を分けてあげるとか、水が欲しい人には水。お金とかではなく、例えば人が困っている時にその必要なものを布施する。これが布施なのです。これが仏教では、とても大切な行為で善根を積むこととなります。

その一番の例は弥勒菩薩。中国の“笑う仏陀”—この方は弥勒菩薩の行をされた。朝市場へ行き、誰に何が必要かをみて、一人一人にあげるのです。実在の方ですが、寺も持たず、いつもあちこち歩きながら、そういうことばかりしていました。中国で“お坊さん”と言ったら、笑う菩薩、弥勒菩薩です。またこの世に生まれて、弥勒如来となって出てこられる。現在は、兜率（とそつ）天におられます。弘法大師様も、未来の如来と一緒に修行したいと、兜率天に行かれて修行されています。

色々な手法があります。先ほど挙げた経典の「般若心経理趣奥義」というのは、チベット仏教の奥義。手元にその漢訳本がありますが、中を見ると、やはりヴィッパッサナーという、カラーパ（微粒子の集まり）などを見る必要がある。しかし、サラッと記載されているのみで、その具体的修行法まで書いてない。

先ほど言った“過去世・現世・来世”は、生死的幻影。結局、過去は映画を逆回りにして見るようなもの。未来は映画のように観る。一切のことが阿頼耶識に入っている。それを繰り返すのです。なので、皆さんは死んで大騒ぎしますが、すぐに転生します。先ほどの理趣奥義では、色々な例を挙げながらサラサラッと書かれている。

実践の一番難しいところは、南方の「アビダンマッタ・サンガッハ」という本に、“これをやりなさい”と図が書かれていますが、その方法は2～3ページで刹那心としか説明していません。本から入った場合は、こうした難点があります。例えば私が南方禅をやるときは、第四定禅で刹那心のチャートを全て観ていく。例えば、一つの眼のカラーパには、54種の物質性がありますが、一つ一つ見ていきます。しかしこの本の記載では、2～3ページのみ。この方法で、十二縁起を観て行くわけです。

十二縁起とは、過去、現在、未来を観ていく。過去に生まれる原因は三つあります。それは、無知、サンカーラ（行）。このサンカーラを深く観る必要がある。そのために、ヴィッパッサナーの修行で全て観てしまう。そして、意識・自覚。これら三つの生まれる原因です。現世においては、各54のルーパ（物質性）、身体は44のルーパ、眼耳鼻舌身意。色声香味触法。眼・耳・鼻・舌・身体ではないということをヴィッパッサナーで、きれいに全て観てしまう。般若心経の実体を観てしまう。究境涅槃ということは、どういうことか。無所得とは、どういうことか。

達磨大師の北伝仏教の方法は、空の世界をバーンと観せます。空を観たからには、南方禅のジャーナ（禅定）に入って、全ての行も観える筈なのです。懐中電灯みたいに、ニミッタで全て観てしまう。それを第四禅で長く続ける必要があるのですね。だから、北方禅をやった場合は、非常に有利なのです。なぜかというと、北方禅で長く坐る練習をしているから、定に入ったら何時間でもできる。

しかし南方禅では、直接ニミッタでヴィッパッサナーに入っていきますから、潰れることがあるのです。私は非常に幸運にも、北方禅で空を体験させていただいてから南方禅をやったので、非常にうまく進みました。なので、こうしたことを説明できるわけです。

しかし本だけでやった場合には、偉い先生方が一心不乱に翻訳されたものでも、大事なところは2、3ページのみ。その数ページの説明中、四界分別が非常に大切なのです。過去がいかにかに現世に繋がり、現世がいかにかに来世に繋がっていくか。

空について、大乘ではもっと深く、宇宙的規模で観て行く。テーラワーダでは、空でよろしいと。それも当たっています。大乘では、空の先をズーッと観て行って、法身に当たったとき空の大世界に入る。だから、どちらの方法でやっても阿羅漢がおられるのです。だから、大乘も良い、テーラワーダも良い、どちらも素晴らしい。

今回、ペルーに行ってきましたが、彼らの話を聞くとチャクラも知っているし、非常に仏教に近い教えがあったようです。そこには秘法があって、直接ヴィパッサナーに入れる方式があるみたいなのですが、何であるか、彼らは分らない。教えてくれるお坊さん達が全員殺されてしまったから、後に続かなかった。その後は、キリスト教のスパニッシュ方式が来た。人を弾圧して、抑えるためのキリスト教。ほんとのキリスト教ではない。

イエス・キリストは、2000年前にラダックに行って修行され、チベットに行って全インドとスリランカを廻って、中近東に帰ったときに、「愛と奉仕」を原理にして教えました。最初のキリストの教えから、オーソドックス（正教）、カトリック、プロテスタント、現代のクリスチャンと、非常に大きく変化した。しかし、それに制圧されたインカの民は非常に仏教に近い。北方のインディアンもそう。仏性のことをよく知っています。彼らの最終的な到達点は、梵天の世界に行けるみたいですね。禅定に入れば、第三禅定で梵天の世界に行けると。

仏教を知ることの幸せ

そういうことで、仏教を知るといふことの幸せ、これはもう凄いことです。特に仏教国の日本で、テーラワーダもある、大乘もある、ヴァジラヤーナ（密教）もある。壁がなく、こうして自由に在家の身で制約をもたずに修行できる。お寺に入れば、お寺を持つという大変な苦しみがあります。お寺の仕組み、組織…。在家で自由に、本当の仏教を勉強をできるというこの幸せは、どんなにお金を積んでも換え難いものなのです。

特にリーマン・ショックで、アメリカの経済が大破壊され、そのツケがユーロや日本に来てますけれど、350年前に綺麗に書かれたこと、まるで無駄なことを350年かかって同じサイクルでやっています。この方の名前は、ベルナード・マンデビルというオランダの方です。1670年生—1733年没。この方の詩を読んだ時、まさに其の通りの繰り返し。輪廻、輪廻とお釈迦様が言うておられますけれども、まるで無駄なことを350年かけて行っている。

350年前に、この方が言うておられることは、まず一般商人を殺す。商人を殺すと大企業が出る。大企業ができれば、工場を潰す。現実にアメリカで起きていますね。その後は、戦争がありますと。第一次・二次世界大戦。

なぜかという、この経済体制の原理は、古代エジプトのテーベの文明から、たった二つの原理による。強いものが全てを取る。それを守るために弱いものは抵抗する。ライオンとシマウマの関係。それだけなのです。その原理で地球上は動いている。だから苦であると。どんなことをしても、どちらの側にとっても。そして最後に破綻が来る。

これを救うというのが仏の教え。涅槃の世界、愛の世界、労わりの世界。「共同社会がありますよ」というのが永遠なる宇宙の仏の教えなのです。それで、お釈迦様が出られて、

今恩恵を受けているのです。このお釈迦様の苦勞たるや…。お釈迦様は、サンマ・サンブッダサ（正覚仏陀）になるために、満天の夜空の星の数ほど自分の眼をくり抜いた。あるときは、王国の全てを投げ捨てて、与えるという行をされた。あるときは、子供や奥さんまで。お釈迦様になられる前に、ネパールの第3王子で生まれた。「ナモ・ブッダ」（ネパールにある遺跡）に、お釈迦様は成道後、ご自分の前世の骨のところに頭を下げに行かれた。

ダライ・ラマの場合、ラサのポタラ宮で13世・12世・11世・10世…と、それぞれの舍利が黄金に守られ、ちゃんと保存されている。なぜかというと、普通の物質と違ってニミッタのように智慧の食糧をいっぱい分け与えるかの如く、人を救う力が出ているから。

中国には、信心地藏菩薩。地藏菩薩のお経を読まれ、“私はどうしてもそのようになりたい”と発心し、山に籠り、土まで食べながら修行され、そのようになられた方がいて、沢山の人を救ったみたいです。九華山に祀られ、地藏菩薩として四大聖地の一つになっています。上海の近くの補陀山・観音菩薩、五台山の文殊菩薩、峨眉山の普賢菩薩。これが四大聖地。

山に入り、土まで食べながら行をされ、「私が死んだら棺に入れ、3年間土中に埋めてくれ」と。「もし腐っていなかったら、身体に金を貼ってください。これは自分のためではなく、人を救うために」と。そして、九華山に祀られています。その方に続いて、3,4人のお坊さんも同じ行を成功され、祀られています。肉体が変わって人を助ける力が出てくるみたいです。だから、ラサのダライ・ラマの霊廟も13・12・11世…と黄金で保存されている。聖者の身体になれば、身体だけでも素晴らしい高德を人に与えるみたいです。

以前、スリランカの仏歯寺で仏縁を頂き、お釈迦様の歯の前で座って瞑想させていただいたことがあります。その体験はなんと、お釈迦様が目の前にいらっしゃると一緒でした。それはもう素晴らしいエネルギー。普通は離れたところから、拝めるだけなのですけどね。これから私はカンボジアに行くのですが、そのカンボジア仏教の先生の導きで、仏歯寺の最高の僧侶に直接つながって、小部屋でお釈迦様の歯にお食事をささげる際、30分ほど目の前で座らせていただいた。その感激たるや、もうバイブレーションが違うのです、本当に。たった1本の仏舎利の歯でも。

この世の中は、摩訶不思議な世界なのです。ただ、物質的なことのみ考えて、ゴミを捨ててもなんでもないし、好き勝手できるし…。しかし、そうでもないみたいです。私達人間プラスそれを護ってくれる天界の方々がいるみたいです。

実は福島原発のことで、放射能はどうなるのだろうと、日本のことをもの凄く心配して、友人から放射能検査機を借りてチェックしてみたのです。そうしたら、なんと東京は、

私の住んでいるトロントよりも数値が低いのです。ペルーのリマと同じか、それより低い。福島はわかりませんが。あの爆発は、広島原爆の168倍らしい。

地球生命体は、私達人間だけのものでもなく、宇宙の生命体も非常に関係しているみたいです。その他に、天界や地獄界もありますしね。しかし、それは見せない。なぜかといったら、あなた達を自由に行動させるため。野の植物が強く素晴らしく育つように。手を加えた温室だと強く育たないでしょう。そういう関係で、「なぜ神は助けてくれない」、「仏は助けてくれない」と、私達はそういうことばかり考えるけれども、「私達自身が何故しないのだろうか」と。一生懸命やれば、阿弥陀仏の国に行けるのです。実に素晴らしい教えです、阿弥陀仏のピュア・ランド（浄土）の教えは。

印光大師という先生は、まさにその通りのピュア・ランド（浄土）禅。初代は、今から1500年くらい前に出て、2代目の方がまた素晴らしいことを仰ってます。「禅定に入れなくてもよい。身と心で阿弥陀如来を心から尊敬して、1万回拝みなさい。必ずや阿弥陀如来の御国に行けます。もしお坊さんで、禅定をもって修行した方は、阿弥陀如来を想えば、すぐに行ける」と。

私の先生がね、こう言うのですよ。「みんな、阿弥陀様、阿弥陀様と難しいこと言うけれど、阿弥陀様と拝んだら、すぐ呼んで下さる。本当に行きたかったら、1万回やりなさい」と。身口意で、三密行。これが、密教では最も大切にすることです。結局、密教であろうが、浄土宗であろうが、禅であろうが、全く一緒のことなのです。心！

人間界に生まれて精進

なぜこういうことを言うのかといえば、皆さんに次の世で暗い世界に行って欲しくない。次の世界でも、できれば人間界に生まれて精進して欲しい。一番良いのは、本当に阿弥陀如来の国に行って、こう言うように精進して欲しい。そこは一切の憂いの無い、素晴らしい世界です。ただそこにいれば、次は涅槃—完全なる自由。悟りというのはそこ。完全なる自由になります。一切の苦から出られるということです。大宇宙の生命体そのものになります。

つまり、西洋では神・神・神…と言うけれども、こうした状態になれるのが仏の教えであり、完全に自由になれる。こんな素晴らしい教えが、たった5000年間。残念ながら、蓮の花が池からスーッと咲く5000年、今が真っ盛りの時。2500年前に生まれて、今がちょうど真ん中。あと2500年しか残ってない。

永遠なる宗教というのは、この地球上に一つもありません。アトランティスも海に消えて滅びました。インカの民は、「実は私達はアトランティスの末裔で、今でも石の使い方を知っています」と。実に不思議な秘法を沢山持っています。お釈迦様は、「そういう霊力は

使わず、一心に心を磨いて、心を大きくするように生きてください」と。ただ正直に、人に優しくしてあげて、尽くしてあげると。真面目に働き、生活状況を真面目にすると。この中に全て入ります。そういうことを私の先生が教えてくれました。

なぜかという、私の先生は韓国・東国大学の学長までされた仏教の大家であります。仏教には 277 の戒律がありますが、その先生は、「たった 3 つだけやれば良い。できなければ 1 つだけでもやれば良い」と。次の世界に生まれるときは、素晴らしい世界が待っています。

私が 17 つの過去世を観たら、やはり自惚れた時は、ブローンと落ちました。大変な苦勞をしました。その苦勞の中で、お坊さんがいなかったので、少しの食糧を仏舎利塔に供養したら、次の世界は本当に良い世界にいました。全ては本当に心なのです。

宿命論や運命論があります。何もしなければそのままですが、それは変えられるのです。善心といいます。34 刹那心。禅定に入れば、常に 34 善心。怒りや妬み、人を恨むなどしていると、34 の善の心がでないのです。一番悪いのは、心を小さくして「これだけだ」とやっていると、16 しか出ないのです。怒りでも 20、妬みでも 21 か 22。心を小さくしていると、無明の世界。ますます無明の世界。

ということで、南方のパオの刹那心を観る方法、お釈迦様の時代から綿々と続き、ここにしか残ってない。だから、私の体験は皆さんと分かち合う義務があるのです。私だけのものではなくて。やはり、皆さんと一緒に“皆俱成仏道”。これしかないのです。こういう体験は、私自身のためにも良いのですが、皆さんにも是非一緒にこの宇宙の素晴らしい永遠なる食物を食べて欲しい。

まさに満月にちょうど花開くように 2500 年、これからあと 2500 年、(法は) 続いていきますけれども、太古のあの素晴らしいエジプト文明も消えました。インカも私達は知りません。永遠なる文明は一つも無いのです。ローマ帝国も潰れました。大英帝国も 150 年、今は栄華の影。アメリカも今は陽が落ちようとしています。結局、私達だけなのです。この世界は何を原動力としているか、この経済は。

先ほど言ったマンデビルさん、この方は経済もやり哲学もやられました。歴史学者でもあります。彼が一切の原理を調べたときに二つだけ。つまり、自惚れと妬み、これが経済を動かす原動力だと。「あの人が新車に乗れば、私も買いたい」、「あの人が綺麗な服を着れば、私も着たい」。ということで、クルクル周って、挙句の果ては、向上もなくなり、空洞化、破滅だけがあります。だから、最後には何にもならない無駄。

大会社の社長で今まで胸を張って、なんだか素晴らしい者になったは良いけれど——例えば東電さんの社長のように——負債が生じ、自分で払えればいいけど、国民が払わなけ

ればならない。その借金は、将来の若い人の血を吸って払う。つまり、ローン、未来の借金。それに縛られて、奴隷化されて。そして挙句に50年すると、今の若い方が年金もらえるかも分らない。900兆円も借金あるのに払えるわけが無い。ギリシャが典型的な例です。そして、アメリカで若者が怒り狂って、ウォール・ストリートにデモして座り込んでいる。ワシントンDCのホワイトハウスの前でも、若者がデモで居座っている。

マンデビルさんが言うように、経済は嘘に次ぐ嘘で動かしている。だからこの経済体制では、政治家は嘘をつくしかないのです。その典型が1794年のフランス革命。マリー・アントワネット王妃が「貧乏人はケーキでも食べたら良いんじゃないですか」。今、同じことをホワイトハウスが言っています。本当に歴史は繰り返す。何も新しいことは無いのです。

そう言うと、「新しいもの、あるじゃないですか。コンピューターとか、飛行機とか」と言うかもしれない。なんと、古代エジプトにはヘリコプターのようなものがあり、飛行機の印影が残っている。ラーマ・ヤーナの太古インド、1000年かけて彫ったエローラ遺跡には、シヴァがミサイルを手に持っている。ほんとにミサイル。アトランティスの時は、自由自在に3日で世界に行けたらしいです。2回の大破壊があり、3回目の核戦争。

これは、何とか防げるようです。なぜかという、皆さん本当に勉強してください。ニミッタの力で、この暗い闇が消えていくのです。もしこれをやらなかったら、第三次世界大戦。人類も破滅の世界に入ります。アメリカは、この地球をたしか3万回絶滅させるだけ力がある。その他、中国、ロシアなどの国が核を持っていれば、どうなりますか。まさに無明。さっきの二つの原因。結局、ライオンとシマウマの関係。経済は何で動かすかという、マンデビルさんの話では、驕りと妬み。この心は、34善心のうち20しかない。だから、どんなに誤魔化しても、暗い無明の世界に入っていきます。

忙しかったら、皆さんは5分でも1分でもいい、ただ心を静めたら34善心です。これをする事もなく、只のうのうと暮らしていたら、なかなか34善心は出ない。正義の為にとか、人の為に尽くす。これも34善心です。だから、「人を助け合いましょう」と言うと、「何だ馬鹿なことして。そんなことしても認められないのに」と。でも、この行為で34善心が出て、次に良い来世が待っています。これは、克明に阿含経に書かれたことです。

日本には、阿含宗というのがあるみたいですが、それとは全然違います。清浄論とブッダ・ゴーサも綺麗に書かれているお経ですので、混同しないように。ということで、さらっと説明しました。



10月9日 法話

摩訶不思議な世界

東京でもお話しましたが、結局般若心経が「何をしなさい、かにをしなさい」ということを確信的に書いているのです。一応題目みたいなものですがけれども。これがマーカーポイントと言って、これを通過して行けば、究竟涅槃に到達できると言う。そしてこの世でそれを修行する機会がなかったとしても、それをただただ読めば、必ずその道に入れると。心が決定してしまいますから。

というのは、今世私がこの仏法界に生まれたのは意味があるのです。私が四つか五つの時かな、今から100年以上前でしょうか、私は非常に高貴な家庭の、全く仏法とは関係ない世界に生まれたのです。その時になぜか、船でヨーロッパからスリランカに行って、洞窟のところで降りて、この洞窟の中に沢山のキャンドルを点けた。でその時に、お願いしたことが、「私はこの不可思議な法を学びたい」と。ということで今世ここにいます。その因果関係はまた続くわけなのですけれども。

「般若心経秘鍵」で、私は自分の過去世を見る前に非常に驚いたことがあるのです。もちろん般若心経に出会ったこともお話しましたがけれども、般若心経秘鍵とその後で発見された文章があって、その最後の数行を読んで、深い感銘と言うか、これが真実だろうというところがあったのです。

弘法大師様は、「昔私が従前の般若心行の説法を聞いたときに、私はまだその奥義に達していません」と、非常に謙遜されて言われているのですね。前世と言うものがあるかないか、と言うことについて私は非常に懐疑的に思っていたのだけれども、この本を読んで、核心的にあるに違いないと、ただし、見ていないと。それで、もちろん般若心経秘鍵の最後の文、ここが素晴らしい所なのです。「私が般若心経に書いている、錦糸に銀糸で書いているときに、非常に真っ暗な夜が、昼のように明るくなった」と。ということは、天が見ていると。まあ摩訶不思議なこともちゃんと書いているわけです。

実はあまりこういうことを書けば、皆な私もこうだったと奇想天外なことを言い始めるから、仏教ではあまり言わないようにと、言われていることがあるわけなのです。これは比丘同士で話せる事なのです。比丘は今話したことは、当然討議します。どうして生まれたか、それは比丘同士の話で、比丘は比丘に対して嘘は言えない。だからそこでは真実の討議だけということになる。

ところが、一般世俗に住んでいる方々は、社会のゴシップとか色々なことがありますから。お釈迦様でも、そういうゴシップに巻き込まれたことが何度でもあると思うのです。

そういうことで、比丘同志しか話さないようにという不立文字があるのですけれども。今回私は日本に来てあえてその不立文字の壁を破って話したかと言うのは、もうそろそろ

こういう壁を破って公開してもいい時期ではないだろうか。こういうことを言ったら、まあ恐れ多く、びっくりするようなことを私が話しているように思うかもしれないけれども、これは本当に私が体験したことで、結局この最後の経文によって、ヴィパッサナーで四界分別の法でもって、最終的には、ナーマ（精神現象）・ルーパ（物質現象）を観る。ナーマ・ルーパからこんどは自分の生死も観ます。何回生まれどうしたかという、それから過去の物質と現在の物質に未来の物質。

そういうことを観ているものだから去年、「アインシュタインは間違っていないけれど完全ではない」と、また、「マックス・プランクの量子力学も、それ自体では完全ではない」と言いました。でもある程度は正しい。そういうことが今回、新聞で出始めましたね。

という風に今まで 100 年間アインシュタインは絶対に揺るがない、というような経文になっていましたけれども、仏教ではすっと見えてしまうのです。それは絶対に完全なものではない。というのは、今宇宙科学が発達したものだから、彼の理論では合わない事が沢山あるわけなのです。光の速度よりも早い物質がある。それはもちろん、心が永遠なる時間も通過してしまう。空間も、ありとあらゆる時空を越えてしまうというのが、皆さん持っているわけなのです。これを仏性と言って、皆さん持っているのです。

だから一瞬に考えたときは、宇宙の彼方であっても、イメージで分るわけなのです。コンピューターでは、宇宙の彼方のことは分からない。回答不能でブレイクダウンします。前回京都で般若心経の一番大事なところを説明いたしました。そしてなぜこの般若心経秘鍵が非常に重要なことか、と言いますと、南方仏教では沢山阿羅漢が出られて、阿羅漢道に達することが、非常に重要なことであります。だからどう涅槃に入るかと。

ですから沢山の阿羅漢の話は、語られていますけれども、北伝仏教でも沢山阿羅漢に達した方がいるわけなのです。釜の中で本当に火をつけられて、殺されるどころだったのに、蓋を開けて見たら、「まだ寒い、寒い」ともう震えるように髭に氷がついて出てくるわけなのです。という風に心が決定してしまうのですね。それくらいの、物質を変えてしまうというか、そういうことができてしまうのです。阿羅漢になれば。

そこまでいなくても、火のエネルギーはどういうものか。火という最終的な物質があるのです。これは見方によれば、熱くもなるしまた寒くもなるわけなのです。同じものでありながら。だからどういう方向にでも展開してしまいます。1000 度であっても、0°、-10° とかになってしまいます。それ以上は現代科学では分析できませんけれども、物質はどこまでも熱くなるし、どこまでも冷たくなるという、破壊できないカラーパ。地水火風の火です。この四大でこの全宇宙の基礎がなっています。

そしてこの後は、意識ですね、識。だから、この五蘊が完全に空であると見た場合に色即是空、空即是色。それが、完全にワンサイクルしたのが大乘で、はっきり言われていま

す。

特に般若心経で到達することがなかなかできないのが、「是諸法空相」。これをはっきり見て分るわけなのです。ところが、「色即是空、空即是色」。アナパナで、ヴィパサナーでそれを観てしまうのですけれど、色即是空ははっきり見えます。「空即是色、受想行識また同じ」と。その「色即是空、受想行識また同じ」というのを南方禅の過程ではっきり観ます。

「受想行識も、また同じ」というのは、どっちから見ても同じなのだけれども南方でヴィパサナーをやるときに、ナーマ・ルーパをやるときに、色が空であると言うところまでまだ行かないのです。この受想行識をナーマ（心）の解析を詳しくやるわけなのです、物質と繋がって。最終段階で、ヴィパサナーで、空の段階に入るから。

それで、終わったと思うわけなのです。それで空を見ればすぐニッバーナ（涅槃）。空＝ニッバーナという誤解まで出てしまいますけれども、そうではないのです。

だから南方仏教の偉いお坊さんが、「色即是空はあるけれども、空即是色はない」と言うことは、結局、是諸法空相つまり、空即是色という、ワンサイクルですね。空から始まって空に帰る。また空の中でも色々な現象が起こってきます。非常に不思議なことだけれども、それが、昨年説明した、義湘大師の法性偈のなかに書いてあります。

その段階がどうしてそこに達していくか。そこで完全にワンサイクルになって、是諸法空相で完全に法身。「法身もまた空」というところまで行かなくてはならないわけなのです。それでワンサイクル。

そういう難しいことを今説明したけれども。北伝の阿羅漢、達磨大師とか、後から続いた慧可から慧能に続く大師ですね。究極の空の世界を知っています、そのワンサイクルを。弘法大師様が、こうして紙で書いているときに、手が明るくなると。結局六祖慧能様が死ぬときには、天が3日間明るく暗くなることがなかった。そして周りの木が、真っ白になったと。お釈迦様も涅槃に入られるときはそうであった。沙羅双樹が真っ白になったと。

そういう風に阿羅漢は、そういう現象を起こす。最高位の阿羅漢といったらおかしいのですけれども、やはり阿羅漢にも色々なことがあって、虎に食われる瞬間に、空を悟ってすぐ涅槃に入る。その現象を起こさない方も沢山おられます。そういう風に、六祖大師みたいに、はっきりと3日間暗くなることがなく、周りが真っ白になったとかね。

弘法大師様も、真っ白にはならない。何故かと言えば、実は死んでいないから。不思議なことで岩の中に入られたと。ところが物質が変わってしまうからね。だから何万年でも時空を越えてしまう。私たちには、幽霊はいないけれども、実はいるのです。幽霊には幽霊の物質があります。だから幽霊が幽霊同士で喧嘩すると、血も流れるし痛いわけなのです。

私達とは物質が違うから、電波が体を通るみたいに、すれ違うわけなのですね。3054

電波もこの板があれば、遮断されてパンと止まってしまいます。地獄界には地獄界の物質があるし、天界には天界の物質があります。こういうことは言葉ではなく、ヴィパッサナーでは実体験してしまいます。どういう物質だったかと聞かれます。説明しなくてははいけません。だから空想ではできないわけです。私は、弘法大師様は阿羅漢以上じゃないかと思えます。もう菩薩の化身だったかもしれませんね。ただニッバーナに行かないで前から何の約束かと言うのは、ここですね、「建立如来の秘号が実は、普賢菩薩である。無戯論（むけろん）如来は、文殊菩薩の秘号である」と、こういうことを簡単に言えるのはね、なかなか名前までどんなであるというのは、普通に勉強しただけでは、たとえ阿羅漢になっても難しいことなのです。

だからもう菩薩の化身ではないかと。菩薩の化身というのは、宇宙的な観音様は、前は仏陀であって、今地上に降りてきて二回目を目指す仏なのですね。だから、南方では考えきれない。嘘だろうと。あり得ないと。南方経典には一つも書いていないと。ところが、私が実体験したところでは、宇宙には無量の仏がいるのです。

ディーパンカンカラという仏が今涅槃に入っていて、いないと。そうじゃない、阿弥陀様もちゃんとおります。続いています。それは嘘じゃない。だからそういうものは、「いない」と否定した場合には見えないわけなのです。というのは、隣の部屋のドアを開けて見ないから。だからそこで、私は南方仏教を否定するわけではないのです。私は南方仏教によって過去の物質も見て、現在も見て未来も見て、ちゃんと繋がっているわけなのです。だから非常に素晴らしい。ただ断片的にただここだけしかないと。

さっき言ったアインシュタイン、今これだけではやって行けないということが、科学の世界では判ったように。実に素晴らしいものだから、過去 2500 年、「南方のこれ以外にしかない」と、そういう風に固まってしまったのではないかと思います。特に南方仏教の場合でも、スリランカ、カンボジア、タイ、と回ってみましたけれども、本当のヴィパッサナーを見ることができるのは、このパオの手法しかないみたいですね。討論したときに。

なぜかといえば、私の非常に親しくしている韓国の比丘尼ですね、この方が 10 年間チャンマーにおったのです。それで有名なマハシの手法とか、チャンミの気づきの観察の瞑想法とかをやったけれども、そこでは皆が「悟りを開いた」と言う。というのは 10 時間スーと坐ったらジャーナに入る。皆はそんな風に 10 時間入れないですからね。完全だと言うのですが、本人は「坐って出たら何もなし。これはおかしい」と。それでパオに行って、こういう風に詳しく見ることができて、初めてこれだと分ったらしいのです。もちろん行を終えてね。

そういう風に南方でも、このパオの手法がミャンマーでは一番らしいのですけれども、今までこれがあまり伝わっていなかったみたいです。マハシは坐らせるし、体使わせるし、北方禅では、やはり体を使って公案で空を観るといふか、体得する方法を取らせませす。それによって初めて体験によって、経典が良く分るので。理論が実に素晴らしいと。これは実験して初めて、「あ、この理論は正しい」と。それまでは仮説なのです。

今、仏教学者が命をかけて研鑽した論文が沢山ありますけれども、それはやっぱり検証しなければいけない。その検証する方法として、四界分別のヴィパッサナー。これではっきり見えますから。そして私はこれによって、般若心経が言う観自在菩薩、そのヴィパッサナーの五自在を使う方法で、深くサンカーラ（行）を見て、「五蘊が空である」と。本当にやっついていくうちに自分の体が空になるのです。「あら、体が消えて、全てが消えて何も無い」と。

これをブッダ・アイ（仏の眼）といいます。カラーパを観た瞬間に、「ああ、お前は仏の眼を持った」と。それをやるためにどうしても、サマーディ、ジャーナ（禅定）が必要なのです。それでやはり弘法大師様も一生懸命に、三摩地（さんまじ）・三摩地と言っています。「三摩地の法門」、これがサマーディのことです。

これは体験しても難しいことが沢山書き並べてあるのです。龍樹菩薩が、「あれでもない、これでもない」と言って、「八つの不」を言って、「増えることもなく、減ることもなく」といふ風に空を説明しているのです。「あれでもない、これでもない。無色声香味触法もない」とかね。

十二因縁を観て迷いから冷める

だから空というのは本当に私も謎謎で…。でもね、これを何回も読んでいるうちに、好きになって、「知りたい、知りたい」と思っているうちに南方のヴィパッサナーで、これが全部通過して分るようになります。それで、「これは正しい。その通りでございます」と。その中で、すべての経典において、どうしても揺るがせないところがあります。ここが般若心経に綺麗に書いてあるのです。それは、「心を一つにして十二因縁は消滅します」ということ。十二因縁をきれいに見た時に、「これはこうなのか」と、迷いから冷めてしまう。

これを観ない間は、ボヤーンとしてまた森に入ってしまうわけです。いくら字で覚えても。結局法華経でも三法、つまり四諦：苦集滅道、苦のことですね。それと十二因縁。それと六波羅蜜。この三法。菩薩は二法を使って、真実・方便で人を導く。高い教えになるのですけれども。私たちがやれば嘘になり、石を投げられるみたいなことになると思うのですけれども。この般若心経の、「瞑想をしながら心を一つにして、その時に、十二人因縁は、麟角、角の鹿で刺しとおせる」と、こういう手法を取っているから普通の人は何のことだろうと、思うのだけれども、十二因縁を観たときに、それが消えるというわけなのです。

十二因縁というのは、南方ではこういうことなのです。**Factors of Dependent Origination** 前世の関係と、今世の関係と、来世の関係のチェーンサイクル（繋がり）をズーッと見ることが十二因縁なのです。それを実際に見なければならぬのです。ああこうだという観念ではないのです。

それを観たときに、弘法大師様が言う、「消滅する」と言うことなのです。「ああ、こんなのか」と言うことで、もうすでに涅槃に行ける鍵をもらったと言うことなのです。これは避けて通れない。法華経の最初のところにもはっきりとそのことを書いています。三法のことを。題目、題目と言うけれども、これをちゃんとやらなくてはいけないわけです。最初のこれを開経と言いますけれども、「無量阿僧祇劫のなかに、六波羅蜜…」。やっぱりそれを観なければだめなわけです。それを見るにはやはりヴィパッサナーですね。「生死の煩惱一時に断滅…」十二因縁のことです。

それを観たときに、生死が断滅して壊れてしまうと。だから法華経で行こうが、他のお経で行こうが、この三つ、四諦、苦集滅道、これでお釈迦様がこの世の中のことはっきりパーッとわかったと言うから、これをはっきり見る必要がある。それを見ることによって、「十二因縁のそれが畏であった」と。「十二の牢に入れられて、永遠に出られない」と。それがこれを観たときに、十二のドア、ここ開けてスーと出て行ってしまうわけなのです。これは架空であるということが分る。

苦集滅道をヴィパッサナーでやったときに、一体、苦とはなにか。25 の種類の苦があるのですけれども、もれなく全部検証してしまいます。つまり「悪魔の誘い」も苦になるわけなのです。それを東京で詳しく説明しました。もう一回説明しなくてはいけないのは無常、アニッチャ。無常というのは 10 あるのです。いつでも変わると、それから、崩壊してしまう、ということは元の形がないから変わってしまう。移り気、パッパッと。それから腐ってしまう。それから耐えられない。耐えているときは変わらない。もう座るのが疲れた、耐えられないとかね。

それから、芯がないからスーとすぐ変わってしまう。絶滅・全滅・死。それから形成する。泥から人形を作る。そうすると、もう泥から変わっている。そのように世の中は、何時でも山ができ、山がなくなり、川になり、川がなくなり、いつでも、アニッチャ・ラッカナー（無常相）という法則があります。それからアナッタ、無我。五種類あります。私が叩いて、「痛い」と。これを「痛くない」ということはできない。私が赤ちゃんから大人になって老人になる。これも私には止められない。赤ちゃんのままで永遠にいられない。私自身では、どうにもできないと言うことが無我なのです。

それから虚空です。スペース。これは叩いても反応するわけがない。何もない。これもアナッタです。そしてこの独立性ですね。この空間に代わって、雲でも何でも呼んでください。ありえない。雲の自性があって、それ自体では私たちに変えることができない。それから、エンプティ・空っぽ。それから、最後ですね、一生懸命にアメリカで経済を作ってウォール・ストリートで世界の経済を動かしたけれども、結局今破綻状態になって、無駄。変えられない。それは自分自身で、自性で動いてしまっている。良くしてやりたいと思ってもできないという。そういうことも、無我に入ります。

こういうことを、東京では、25の苦を説明して、今回は、アニッチャ・ドゥッカ・アナッタ（無常・苦・無我）。こういう状態であるということ、さらっと言いました。こういうことにはっきり見て、苦ということが分るわけなのです。この世は苦であると。それが集まっているからどうしても、こういう経済破綻とか、すべてがうまく行かないわけなのです。

うまく行くときもあるけれども、必ずやどこかでうまく行かなくなる。永遠に良くなるという、一方通行の、極楽世界であれば良いのだけれども、ならない仕組みなのです。ここで素晴らしいことは、真言の教えは、「実はそれも架空であり、ここは道場であり、これ自体すらが清浄に向かう。すべては川の流れのように良くなる」と言うことが、「般若波羅蜜多理趣」になるわけなのです。

だから、実はこうであるけれども、大樂の修行法があるということを探るのが真言密教で、それがまた素晴らしい。ところがここで問題になるのが、サマーディ。三摩地（さんまじ）の法門。そういうことで、浄土、阿弥陀の国へ行くのもまたサマーディ。つまりどうしても通過しなくてはならない問題が、瞑想で行くしかないわけなのです。アーナパーナ・サティ（呼吸瞑想）にしるこれ全部サマーディのことなのです。結局、どの手法で行ってもいいわけなのです。必ずや良い結果が起こります。

だから、「あれはダメ、これはダメ」ということはないのです。実は、その暇もないのです。ただ私たちはどの道をとろうが、真直ぐに歩く方法が、サマーディであるということ覚えておいて、「これはダメ、あれはダメ」ではないのです。だから、「南伝仏教は素晴らしい、これだけだ」と。確かにこの道具を使えば使いやすから、私は皆さんにこの道具を持ってきたということであって、またそれを使えば良いわけなのです。

それで北方の禪、「また公案だ。これは難しい」と。それはまた道具であって、それを使えば、三摩地の法門に入りやすいということなのです。だから、良いものはどんどん使ってね。昔は歩いてきたけれども、今は自転車。自転車からバイク、バイクから車。今度は飛行機ね。そういうことなのです。所変われば品変わるで、使ったらいつまでも固執しな

い。

船で海を越えて、その船を持って大陸を渡るわけには行かないから、それを捨てて、テクテク歩いて、馬を見つけたら、お馬さんに乗ってトコトコ行く。馬が山に登れないから、今度は馬を捨てて自分で歩くと。そういうことで、固執しないということですね。かといって、「それらはダメ」とかいうことではなく、お馬さんは一生懸命やったから、尊敬しなければいけないしね。この宗派はこれやってくれたと。船は太平洋を越えて運んでくれたから、全て尊敬しなければいけないと私は思っています。

ただ一心に、素晴らしい弘法大師様にしろ、義湘大師様にしろ、六祖大師様にしろすべてこの方々は、妬みなし。すべて人が良くなれば、ハッピーなのです。ラッフィン・ブッダで、弥勒菩薩はいつも「ハハハハハッ」。中国におられましたね、布袋さんが実は弥勒菩薩なのです。ただただ人が幸せになれば、楽しいわけです。喜びいっぱい、安穩という境地に入るのでしょうか。

ただ私たちは、いつも外ばかり気にして、「いやもう少しなんかしてくれたら良いじゃないか。お前良いもの持っている」とか、そんなことばかり。猿の喧嘩ばかりして。だからそういう事も大師様は越えてしまうのです。「よしよし。皆、可愛い、可愛い。何とかして上げましょう」と。「頂戴、頂戴」。「はい、上げます、上げます」。そういうことです。

